

『それいゆ』
第 1 稿

大川祥吾

1 / 30

登場人物

遠山牧子 (42) : シングルマザー
高木久仁子 (32) : 牧子の妹
遠山圭悟 (49) : 牧子の元夫
遠山光一 (12) : 兄・中学一年生
遠山将 (8) : 弟・小学三年生
大介の母 (35) : 将の友達の母親
竜彦の母 (37) : 将の友達の母親
治 (36) : 牧子の弟
トミ (70) : 牧子の母

2 / 30

○火事になった民家（夕方）

牧子（42）が炎に包まれる家を不安げに見つめながら、小学三年になる将（8）の手を強く握っている。消防隊が消火活動をしており、野次馬も多い。

久仁子・声「姉さん別れて良かったよ」

牧子・声「そうだね」

久仁子・声「こう言っちゃなんだけど、いいきっかけだったんじゃない？誰も怪我とか無かったんだしさ」

牧子・声「…色々燃えちゃったけど」

○ポロポロの貸家

居間に座っている圭悟（49）

の後ろ姿に、軽く頭を下げ玄関

から出ていく牧子。

久仁子・声「お金は？少しでも返してくれそうなの？」

牧子・声「父さん達には言ったんだけど、私が、払う事にしたんだ」

久仁子・声「ええ？だって養育費とかも無いんでしょ？」

○牧子のアパート・外観

家を眺める牧子。

牧子・声「家もね、小学校の近くでアパート借りたのさ、ちよつと古いけど三人ならなんとか大丈夫そう」

久仁子・声「うち、戻らないんだね」

牧子・声「これ以上、父さん達に迷惑か
けないっしょ」

家に入っていく牧子。アパートの外観に太陽の光が降り注ぐ。

タイトル「それいゆ」

○ビデオレンタル高木・店内

個人経営でさほど広くない店内。
カウンターの途中でエプロン姿の
久仁子（32）と、その前で話
している牧子。他に人は居な
かったがお客さんが入店。

久仁子 「いらっしやいませ」

牧子 「ごめんね、じゃあまた」

久仁子 「姉さん、なんかあったら連絡
してよ、折角同じ町に住んでるんだし」

牧子 「：うん」

店を出る牧子。見送る久仁子。

○牧子のアパート・居間（夕方）

西日が差し込む部屋で将が動物
の図鑑を読んでいて、牧子は洗
濯物を取り込んでいる。

牧子 「将、これ自分のところに閉まっ
ておいて」

5 / 30

将がのそのそと洗濯物を持って
タンスの前に座る。
牧子は違う洗濯物を畳んでいる。
将 「これもう小さいんだよなあ」
牧子 「んー？」

将がネズミ色のトレーナーを手
に持ってマジマジ見ている。

牧子 「そう？」

将に近付きそのトレーナーを将
の身体に合わせる牧子。

よく見ると襟元や袖の部分も少
し擦り切れている。

牧子 「そうかもねえ」

○牧子のアパート・居間（朝）

学生服を着た光一（12）と、
ランドセルを横に置いた将がご
飯を食べている。台所で洗い物
をしている牧子。

6 / 30

○ 保険会社営業所オフィス内

男女十名程度が働いているオフィスに、スーツ姿の男性に連れられ、牧子が入って来る。

男性 「朝礼でもお伝えしていましたが、こちらが今日から働いてもらう遠山牧子さんです」

牧子 「遠山です、どうぞ宜しくお願いします（頭を下げる）」

牧子に疎らな拍手が贈られる。

X X X

時間経過、デスクで書類の書き方を教わっている牧子。

○ 商店街

将と光一に買い物袋を持たせて三人で歩いている牧子達。

光一 「あ、お父さ……」

50M程前方から圭悟がこちらに歩いてくるが、彼は牧子に気付いた途端にくると回れ右をして去る。不快そうな牧子。

○ スナック・裏口（夜）

店内から客の騒ぐ声が漏れてくるなか、スナックのママと牧子が話している。

牧子 「これ、今月の返済分です」

ママ 「牧子さん大丈夫なの？」

牧子 「仕事も見つかっただけ」

渡された茶封筒の中身の現金を確認するママ。

牧子 「少しずつで申し訳ないんです

が、必ずお返ししますので……」

ママ 「それはいいんだけど……」

○ 牧子のアパート・居間（夜）

奥の部屋では将が寝ている。
薄明かりの中で財布とレシート
を広げ家計簿に記している。

○ 牧子のアパートの前

前と後ろにカゴが付いた赤いマ
マチャリに牧子が乗る練習をし
ている。中々安定せず、少しず
つ漕ぐ練習をしている。

9 / 30

○ 金物屋・店先

70歳近くのお婆ちゃんが、牧
子と先輩女性と話している。

牧子 「宜しくお願ひします」

お婆ちゃん 「うん、はあい」

先輩女性 「遠山さんも大変なんですよ、

上が中学一年生でしたっけ？」

牧子 「はい、下が三年生で」

お婆ちゃん 「あら大変でしょう」

牧子 「まあ、なんとか」

○ 牧子のアパート・居間（夕方）

電話で話している牧子。

牧子 「じゃあまた、お金まとまった
ら連絡する、父さんにも伝えておいて、
母さんも元気で、はい；」

そつと受話器を置いて、深く息
を吐く。そして気合を入れ直し
て机の上の郵便物を整理し始め
る。幾つか見ている中で、一つ
の白い封筒を手取る。
裏に書いてある差出人を見て、
表情が変わる。

10 / 30

○久仁子の家・和室

久仁子と牧子がお茶を飲みながら話している。机の上には白い封筒が開けられており、久仁子が便箋を手になっている。

牧子 「どうしようもないでしょ？」

久仁子 「ありえないしよや、光一君はまあもう判ってるだろうからいいけど、将ちゃんまだ三年生でしょ？」

牧子 「ほんとさ、何考えてんだか：父親らしい事したいんだろうけど」

久仁子 「父親ならもっとやるべき事あるしよや、姉さんばかり苦労してさ、また夜も働くんでしょ？」

牧子 「え？ ああお掃除のね、まあ私じゃ、遊園地とか連れて行けないけど」

久仁子 「嫌じゃないの？ 名字戻さなかつたのもこの町出なかつたのも、子供の為ってのは私もわかるけどさ、我慢ばっかりしても良くないよ」

11 / 30

牧子 「学校変わったたり、名字変わったりって嫌でしょ」

久仁子 「：そうだけどさ、これは駄目だよ（便箋を見て）遊園地って！」

牧子 「ねえ」

○牧子のアパート・居間（夕方）

テレビゲームをしている将と、友達が二人。台所で棚を漁ってお菓子を皿に移す牧子。

牧子 「お菓子ここ置いとくよ」

将 「お、やった！」

友達二人 「ありがとうございます」

○パチンコ屋・ホール（夜）

掃除をしている牧子。他にも同じくらいの年齢の女性が4、5名働いている。

12 / 30

○住宅街の路上

前後のカゴに鞆を積み、自転車で走っている牧子。

女性の声「遠山さん！」

自転車を停めて声の方を向く。

X X X

自転車を降り大介の母（35）

と話している牧子。

大介の母「うちの子がよくお邪魔しているみたいで、あ、中村大介の母です」

牧子「ああ、大介君の」

大介の母「すいませんなんかいつも」

牧子「いやいやなんも、うち学校から近いから、こちらこそ遊んで貰って」

大介の母「お仕事ですか？」

牧子「はい、保険の……」

大介の母「そうなんです、あ、私あのお店のところでお店やってる」

牧子「えー四丁目」

大介の母「遠山さんの事は前から知って、あの火事で……うちも、実は去年別れてまして」

牧子「そうですか」

大介の母「あ、そうだ、今度うちのお店に遊びに来ませんか？そうだ！もう一人、竜彦君のお母さんも旦那居ないんじゃないかな」

牧子「ああ、竜彦君」

大介の母「将君とも、仲良いですよ」

牧子「うん、うちにも来た事あるんじゃないかな」

大介の母「じゃあ良かったら、開店前とかでも良いし」

○金物店・店先

お婆ちゃんに書類を渡して説明している牧子。

牧子 「この丸のところに、名前と住所と、あと判子をお願いします」
お婆ちゃん 「はあい」

○ 銭湯 えびすや・入口（夜）

風呂上がりの姿のまま、入口前で待っている光一と将。そこへ
牧子が中から出て来る。

牧子 「お待たせー」

そのまま三人で歩いて行く。

15 / 30

○ 居酒屋 「ひとみ」（夕方）

開店準備中の店内。カウンターの中で大介の母がおしぼりや食器の準備をしている。

椅子には牧子と竜彦の母（37）が座って話している。

竜彦の母 「そうだなあ、生意気な事言う

ようになったなーって時は、逆に大人になつたなあって思うかも」

大介の母 「あーわかる」

牧子 「うん、そうだね」

大介の母 「妹の面倒見てくれたり、ああ

でも、私洗濯の時になんか思うかも」

竜彦の母 「洗濯？」

大介の母 「うん、この服もう着れなくなつてきたかなーって」

二人 「ああ、わかるー」

三人笑う。

三人笑う。

大介の母 「…こうしてさ、子供らが友達でつていうのは偶然だけど、お互い女手一つで頑張りましたよ！」

牧子 「そうだね」

竜彦の母 「うん！頑張ろう、男なんて要らないよ！」

大介の母 「あ、でも新しい旦那ができたらそれはそれで！」

三人笑う。

16 / 30

○公園（夕方）

楽しそうに遊んでいる将と友達
二人。空は既に赤く薄暗い。

○牧子のアパート・玄関（夕方）

両手に買い物袋を下げた牧子。

牧子 「ただいまー」

玄関の靴を見て、家に入りながら居間にいる光一に尋ねる。

牧子 「将は？」

光一 「まだ帰ってきてない」

牧子 「えー、そう」

○牧子のアパート・居間（夕方）

台所からトントんと包丁の軽快
なりズムが響いている。音が止

まり居間に牧子が入ってくる。
不安げに腕時計を見る牧子。

牧子 「ねえ光一、ちょっと外行って
見えてくれない？」

光一 「えー？」

すると玄関の戸を叩く音が聞こ
え、戸が開けられると同時に男
性の声が聞こえる。

男性の声 「すみませーん、遠山さんのお
宅でしょうか」

牧子 「はい」

直ぐに玄関へ出る牧子。

牧子 「（驚き）えっ！」

玄関には警察官と、その後には
将が下を向いて居る。

○牧子のアパート・玄関（夕方）

警察官が手帳に何かを書き込み
ながら、牧子と話している。

牧子 「本当にすみませんでした」

警察官 「いやね、何かした訳じゃないんで、ちょっと暗くなつてきちゃったから、保護させて貰ったっていうね、それだけなんですよ」

牧子 「すみません」

警察官 「友達と遊んでて、夢中になっちゃったんじゃないかな、うん」

牧子 「そうですか」

警察官 「その友達二人のお宅もね、母子家庭だったんでね」

牧子 「：はあ」

その言葉に反応し、眉間にシワが寄る牧子。

警察官 「ご苦労なさってるとは思いますが、どうぞ」

牧子 「：」

それまで警察官の顔を見つめていた牧子だったが、目を反らして明らかに不服な表情。

19 / 30

警察官 「じゃあ、私はこれで失礼しますの」

牧子 「はい」

軽く頭を下げて見送る牧子。送った後も暫く玄関から動かない。その背中を居間から見ている光一と将。

※ここからモニタージュ

○保険会社営業所オフィス内

朝礼で女性社員が表彰されている。横のホワイトボードには「今月の新規獲得数」と書かれたノルマ表が飾っており、赤線グラフが書いてある。神妙な面持ちで拍手を贈る牧子。

20 / 30

○大きくて立派な家の玄関

保険の資料を見せる牧子と、聞いているその家の主婦。

○牧子のアパート・居間（夜）

テレビを見ている光一と将。その後にある台所でご飯の準備をしている牧子。

○住宅街・上り坂

自転車を押して歩く牧子。すれ違う知人に挨拶。

○スナック・裏口（夜）

ママに茶封筒を渡す牧子。

○パチンコ屋・ホール（夜）

掃除している牧子。

○牧子のアパート・居間（夜）

家計簿を付ける牧子。書類の横に白い封筒。差出人は遠山圭悟。ちらりと封筒を眺める。

○保険会社営業所オフィス内

デスクに座って書類を作成している牧子。

○牧子のアパート・外観（夜）

外観の絵。テレビの音が少し漏れて聞こえてくる。
※モニタージユの終わり。

○ 牧子のアパート・居間（夜）

テレビを見ている光一と将。電話が鳴り、光一が出る。

光一 「もしもし遠山です」

台所で洗い物をしている牧子。時計を見ると夜10時近く、自分への電話だと思い、出る準備をしている。

光一 「お母さん電話、お婆ちゃん」

その言葉を聞いて少し固まる牧子。恐る恐る電話に出る。

牧子 「もしもし？」

○ 葬式会場・広間

お経が響くお寺の大広間。高齢な男性の遺影が飾られている葬式会場。参列者は200人を越えている。

○ 葬式会場・控え室

総勢25名の親族達が喪服を着て並んで座っており、その中には牧子と光一と将。また久仁子とその家族も居る。

前にはお坊さんと治（36）とトミ（70）が立っている。

治 「お酒飲んで潰れてはみんなに心配ばかりかけていた父さんだったけど、最後は眠るようになって息を引き取りました。74歳という、まだちょっと若いんじゃないかと思うけど、父さんらしいといえれば父さんらしいかなと。何より、病気もあちこちしていたので、苦しまずに逝けたというのも、良かったんじゃないかなと。」

治の話聞きながら、涙をグツと堪えている牧子。後で久仁子

は泣いている。

○葬式会場・裏庭

喪服姿の牧子とトミがひっそりと話している。裏山から鳥たちの鳴き声が響いている。

トミ 「二人とも大きくなっただね」

牧子 「母さん、私、父さんに心配ばっかりかけて、なんも親孝行らしい事出来なかった」

トミ 「あんたは子供しっかり育ててるじゃない、それが一番いいの」

牧子 「…」

トミ 「親なんて先に逝くもんなんだから」

涙を堪えている牧子。

トミ 「…お金の事だけだね、うちの分はもういいから」

牧子 「え？」

25 / 30

トミ 「あの子らには私から言うておくから、まだ他にも借りてるのあるんでしょ？ そっちしっかり払いなさい」

牧子 「でも…」

トミ 「あと」

手提げ鞆から茶封筒を取り出して牧子に渡すトミ。

牧子 「いいよそんな」

トミ 「なんもちよっとしか入ってないから、父さんからだから」

牧子 「…うん」

声が涙ぐんで来る牧子。

トミ 「光ちゃんは今もう中学生かい、将ちゃんも大きくなって」

牧子 「うん」

トミ 「あんたはちゃんとやってるよ」

トミのその言葉に、一気に涙が溢れ出す牧子。

トミ 「えらいえらい」

26 / 30

牧子の肩を優しく撫でるトミ。

牧子 「…こないだ、将が警察と一緒に帰ってきて、子供達みんな母子家庭だったって言われて、私悔しくて、子供には絶対そういう思いさせないようにつてやっってきたのに、周りから、そういう風に思われてたんだって、悔しくて…私…なんて言ったらいいかわかんなくて」

トミ 「うんうん」

牧子 「私、私…」

牧子の肩を優しく撫でるトミ。
鳥たちの鳴き声が響いている。

○ 田舎の駅・ホーム

荷物を抱えた牧子、光一、将。
改札の外に居る親戚に向かって
手を振っている。

27 / 30

○ 走行中の電車内

窓の外を見つめる牧子。車内に視線を戻すと、光一と将が言い争いをしている。その様子を見ながら優しく微笑む牧子。

○ 保険会社営業所・オフィス内

デスクワークしている牧子。

○ 牧子のアパート・居間（朝）

制服姿の光一と、ランドセルを横に置いた将がご飯を食べてる。

○ 住宅街・上り坂

必死で漕ぎながら登る牧子。

28 / 30

○ ビデオレンタル高木・店内

棚の掃除をしていた手を止め、

牧子と話している久仁子。

久仁子 「ええっ！いいの？」

牧子 「結局さ、あの子達にしたら、

父親はあの人しか居ないんだし」

※ボイスオーバーで声はそのまま

○ 駅前の駐車場

自動車の前で待っている圭悟。

将が向かってくる。

久仁子・声 「でも嫌じゃないの？」

牧子・声 「まあね、だから条件つけた」

久仁子・声 「条件？」

向かって来る将の後に、友達が

二人ついてきている。

牧子・声 「うん、友達も一緒になって」

久仁子・声 「全然いいじゃない」

○ 牧子のアパート・外観

太陽の光が降り注ぐ。

○ 牧子のアパート・窓際

窓から洗濯物を干している牧子。

将が着ていたネズミ色のトレー

ナーを干している。

ピンと伸ばして眺める。

笑顔の牧子。

終わり